



長城を行く 第三回

金山嶺



黄崖関を後にして北に80キロ、万里の長城の白眉ともいえる絶景の地だ。北京と河北省承德の境界にある金山嶺から城壁に取りつき、司馬台まで燕山の尾根を伝って風化にまかせた長城を逆走する。

金山嶺長城への登り口は承德市の南辺に位置する。北京市内から高速バスで3時間、およそ130キロの距離にあり、一般的には古北口という地名で知られている。人気がない山里の道を歩いていく。すると右手前方に美しい古廟が忽然と姿を現した。おもわず見とれて数葉の写真を撮る。我にかえり歩みを進めて三門をくぐると、そこが金山嶺長城の入り口になっている。急峻な斜面を70メートルほど一気に駆け上がる。空が大きくなって風景が変わり、東西12キロにわたり蛇行して

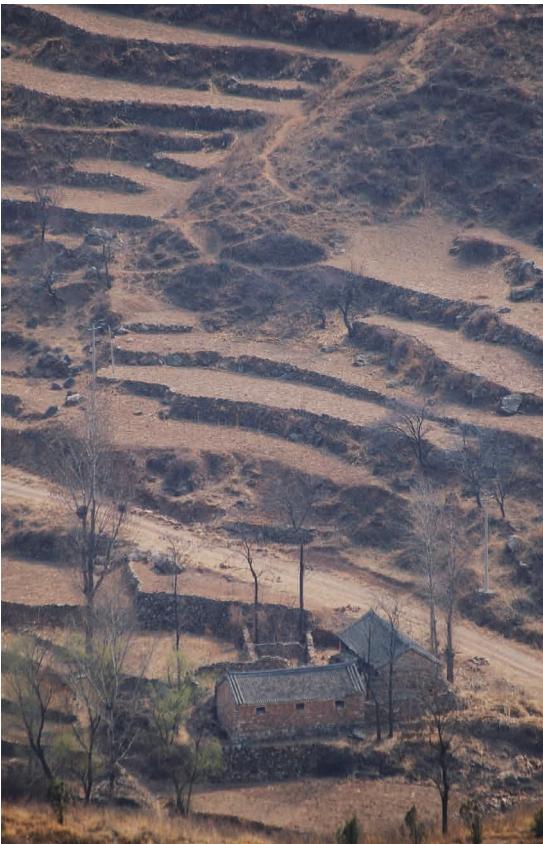
のたうつ万里の巨龍が眼前に現れる。これが金山嶺だ。敵楼または敵台とよばれる見張り所がおおよそ100メートル間隔で70以上も連なり、絶景に錦を添える。西域の嘉峪関まで全長6千キロをほこる明代長城の中で、もつとも優美で比類のない雄壮さに圧倒され、言葉を失う。あまり修復の手が入っていない原始の長城をひたすら東に縦走する。なかば崩れ落ちた敵楼に登って南北に展開するかつての漢界と夷界を鳥瞰すれば、ここもやはり南の農耕地帯を樹林と

段々畑が覆い、北の遊牧地帯には果てしのない草原が横たわっているのだ。

燕山の尾根に沿ってアップダウンする城壁の敵楼をひとつずつ巡っていくと、それらの建築構造に幾つかのパターンがあることに気がついた。窓の数がそれぞれに違うのだ。三つあるのが三眼楼で、四眼楼や五眼楼もある。二階建て構造の敵楼は他よりも背が高く、天にそびえている。楼の内部も四の字型、日の字型、川の字型、井の字型と多様で、むしろ同じ構造をさがすのが難しい。地形によって敵軍を撃退する方法が異なるからで、設計者の苦心が感じられる。付近には物置のような区画も散見される。敵を迎え撃つ武器類を貯えていたにちがいない。

ら歩いても長城は尽きない。明の隆慶2（1568）年、12代皇帝の朱載堉は忍び寄る北方の脅威を前にして長城の大改修を号令し、それが現存する万里の長城の原形になった。改修工事には全国から広く壮丁を徴用し、その中には江蘇省の鎮江金山辺りから駆り集められた大量の兵士がいた。金山の者たちは苦役に増幅する望郷の想いを自らが築いた山嶺の城壁や敵楼に託し、いつしか古北口の長城には防人たちの故郷の名が冠され、金山嶺と美称されるようになったのだという。

万里の長城の要衝には「関」とか「堡」、あるいは「口」という字のつく呼称が多い。それぞれ関所、堡壘、往来の接点のことを指す。北方の満州族が中国を統一してこれらの拠点は不要になったが、康熙帝が承德に夏宮の避暑山荘を造ったので、古北口は皇帝の通過地としての榮譽に浴し、金山嶺はそのランドマークになった。おおよそ5時間の縦走の後、深い峡谷の向こうに天を突く司馬台長城の雄姿が現れ、金山嶺が終ったことを知る。



▲鴛鴦湖
燕山山脈から流れ出た水は峡谷の河水となって鴛鴦湖に貯まり、一部は北京市民の水源になる密雲ダムに達する。鴛鴦湖の湖水は金山嶺と司馬台の長城を分け、荒涼とした風景に安堵感をあたえる。

◀燕山支脈に広がる段々畑
長城の南の河北は耕地が少なく、人煙まねな山深い斜面にも段々畑が散在している。城壁を北側に越えると耕地や樹林はなくなり、草原が大海のうねりのようにどこまでも続いている

敵楼と敵楼をつなぐ城壁には人が隠れるほどの高さの壁があり、弓矢を射るための箭窓が穿たれている。その壁は敵が襲来する北の夷界側がより高く、南に位置する味方の漢界側は低く築いていて合理的だ。壁の足下には、夷界にむけて直径50センチほどの丸穴が幾つも掘り抜かれている。城壁によじ登ろうとする敵を威嚇するための石を投げ落とす工夫である。前方に敵楼がひとつ、またひとつと出現する。いく

中村雄雄（なかもら たつお）◆ラジオペン、オリンパス、博報堂などに勤務し、中国に16年間駐在する。現在、横浜国立大学大学院に在籍